崑崙四水説の地理思想史的考察

——仏典及び旧約聖書の四河説との関連において——

海野一隆

【要約】 中国西北方の神山崑崙から、黄河、赤水、青水、黒水の四河川が発源するという古代中国の説話を一種の世界地理的構想として把えるとき、それは多分に非中国的要素を含んでいる。一方古代インドの仏教では、ヒマラヤ山中の阿耨達池からガンジス、インダスを含む四大河が四方に流出するという。また旧約聖書創世記はエデンの園を源とするチグリス、ユーフラテスなどの四河を記述する。中国以外にもこうした類似の伝承がある以上、崑崙四水説が単独に発生したとはまず考えられない。一体このような四河説が発生するにはそれにふさわしい地形的環境が必要であろう。ところが中国、インド、ヘブライともにそうした積極的要素に乏しい。つまりこれら三種の四河説は姉妹関係にあるにすぎず、地形その他から見て恐らく中央アジア方面の民族の間に生まれたより古い四河説を受けたものであろう。

はしがき

古代中国では自己の郷土を世界の中心と考える素朴な世界観が、儒教的精神に支えられてかなり一般化していたと考えられる。しかし他方では騶衍の大九州説もその一つではあるが、崑崙説話が示すように一層自由な世界の地理的把握が存在した。崑崙説話は文献によつて内容的に必ずしも一定せず、時代的にも変化の跡を見せるが、ここではなるべくその原初的形態を復原しつつ、殊に崑崙山から発するという四水を仏教や旧約聖書の四河説と比較して、古代人が抱いた地理像の一面を明らかにしてみようと思う。

一　崑崙山の位置

崑崙山に関する古代の文献の記載は多く断片的であるが、それらを綜合してみると、崑崙山は中国の西北方にあつて、九層或いは三層をなして天空に聳える一大高山である。その山上は天帝の地上における都で、一種の理想郷だと考えられている。その高さは文献によつて必ずしも一致しないが、[1] 例えば史記大宛伝に引く禹本紀には、

崑崙は其の高さ二千五百余里、日月の相い避け隠れて光明をなす所である。其の上に醴泉、瑤池がある。

とするから、その数字は論外として極めて特異な高山であることが分る。このことはまた天帝の下都であることとも関連して、古代の他の多くの神山とは異つた性格を荷担うものとして注目される。[2]

こうした構造をもつ高山が現実に存在しないことは言うまでもないが、それが西北方にあると考えられたのは何故であろうか。これは恐らく、天は西北に傾き、地は東南に傾くとする楚辞天問篇や列子湯問篇などの思想と関連するもので、東及び南に海をもち、諸河川の東流する中国の地勢から導き出されたものであろう。[3]

ところが、この中国西北方に位置する崑崙山が、実は大地の中央であるという注目すべき記述が、水経注巻一の本文及び河図括地象に見える。時代的にこれらを遡る文献には見当らないので、果してこの観念がどれほどの古さを持つかは詳かでないけれども、それが中華的世界観とは全く異質的なものであることは指摘するまでもなかろう。

これについては既に、御手洗勝氏の見解があるので、しばらくそれに耳を傾けてみよう。[4] 氏は崑崙なる名称が本来中国語で丸いという意味だとし、崑崙山は廻転する天と相対する観念で、それが九層から成るのも九重天を反映しており、天帝の下都であるのも天帝の坐所たる北辰の直下にあるからに他ならないとされる。従つて北辰が天の中央にあると信ぜられたことから崑崙を大地の中央に位置せしめたのだと。確かに古代中国では天地を一体のものとして把えたから、こうした解釈も当を得ないものではない。だが氏の言われるように、北辰の直下すなわち天の廻転軸の地面との交叉点に崑崙山があれば、それは当然中国の北方にあたる筈である。この点についての氏の説明は不充分で、ただ天が西北に傾くとする古代の宇宙観を示されるにすぎない。それではこの崑崙山の位置はいかに説明されるべきであろうか。ここでは問題の提示だけにとどめて、論点を崑崙の四水に移すことにしたい。

二　崑崙の四水

古代の文献に徴すると、崑崙山はまた黄河の発源地でもある。然

らば崑崙説話は黄河が流出する高山を知つてそれを神秘化したものであろうか。石田幹之助教授はこれについて崑崙山を実在のものとし、古くから河源崇拝の風習をもつていた漢民族が、春秋末から戦国始め頃に南山山脈東部に比定される崑崙山を知り、そこを河源と考えたのだと言われる。[5] その実在の山がのちに高山崇拝、方角崇拝、楽土思想などによつて潤色され神秘化されたのであつて、禹貢などに河源を積石山[6]とするのは一説にすぎず、一般には崑崙河源説が有力であつた、と。このような見解をとられたのは、教授が崑崙を記す文献中、禹貢を最も信頼できる初期のものと判断されたことによると思われる。この史料批判に対して御手洗氏は、本来非合理的な神話伝説は現実的な禹貢の記述よりもむしろ神怪に富む山海経などにその原型をとどめると反駁された。[7] 何れにしてもこの河源説が、崑崙説話全体の中でどんな位置を占めるかを改めて検討してみる必要があるように思われる。

ところで先ず注意すべきは崑崙山が単に河源であるだけでなく、黄河を含む四河川の水源であるということである。それについて山海経の海内西経は次のように記している。

海内昆侖の虚は西北にあつて帝の下都である。昆侖の虚は方八百里、高さ万仞、上に木禾があり長さ五尋、大きさ五囲である。（中略）赤水は東南隅から出て以つて其の東北を行く。河水は東北隅から出て以つて其の北を行き、西南し又渤海に入り又海外に出る。即ち西して北し禹の導く所の積石山に入る。洋水、黒水は西北隅から出て以つて東し、東行し又東北し南して海に入る、羽民の南である。弱水、青水は西南隅から出て以つて東し又北し又西南して畢方鳥の東を過ぎる。（傍点は筆者、以下同じ）

またその西山経には、

（鐘山の西九百里）昆侖の丘という。これ実に帝の下都である。（中略）河水はここから出て南流し、東して無逢（山）に注ぐ。赤水はここから出て東南流して氾天（山）の水に注ぐ。洋水はここから出て西南流して醜塗（山）の水に注ぐ。黒水はここから出て西流して大杼（山）に（注ぐ）。

とあつて、同一書中に二つの異つた記述を載せている。このほか崑崙の四水を具体的に記すものとしては、淮南子地形訓がある。それは仙境としての崑崙山の構造を詳述したのち、

河水は昆侖の東北陬から出て、渤海を貫き禹の導く所の積石山に入る。赤水は其の東南陬から出て、西南して南海丹沢の東に注ぐ。赤水の東に弱水があり、窮石から出て合黎に至る。余波は流沙に入り流沙を絶り、南して南海に入る。洋水は其の西北陬から出て、南海羽民の南に入る。凡そ四水は帝の神泉であつて、以つて百薬を和し、以つて万物を潤おす。

と記すが、山海経の記述と一致しない部分がある。

これらのうち、淮南子が弱水の発源地を崑崙としないのは、禹貢の弱水に関する記述に従つたものであろう。[8] 弱水と呼ばれる河川は崑崙の四水以外にもあつたらしく、西山経の記述によつてもそれが窺える。[9] また海内西経では洋水、黒水を同一河川の異称として記しているから、西山経の四水は実は三河川しかないことになるが、これはどう解釈すべきだろうか。大荒南経には、〃大荒の中に山あり、死塗の山と名づける。青水はここに窮まる〃とあり、郝懿行の説では醜塗と死塗とは同一のものであろうという。とすれば西山経の洋水は、もと青水とあつたのがのち誤まれたものと見てよかろう。

以上の推測が当つているとすれば、古代中国では崑崙山から黄河・赤水・洋水（黒水）・弱水（青水）の四河川が発源すると考えられていたことが分る。なお列子湯問篇の

国（終北の国）の中に当りて山あり、山は壺領と名づく、[10] 状は瓠瓠のごとし。頂に口あり、状は員環のごとく、名づけて滋穴という。水ありて湧出す、名づけて神瀵という。臭は蘭椒に過ぎ味は醇醴に過ぐ。一源分れて四埒（埒は山上の水流の意）となり山下に注ぎ、一国を経営して悉く偏からざるはない。

という記述もまた系統を同じくする説話と言えるだろう。

さてこれら四水の中、黄河以外は現実の何れの河川を指したものか明らかでない。けれども山海経の諸篇において、それらが流沙と共に山野・民族などの地理的位置を示すメルクマールとして扱われることから、[11] これら三河川は中国西方の砂漠地方の相当の大河であつたことが知られる。全く断片化しているとは言え、三河川付近について山海経の叙述はかなり具体的で、黄河流域を居住空間とした漢民族の空想を越えたものがあるように思われる。後代永く河源としてのみ崑崙が追究されていつたのに対して、他の三河川が殆んど忘れられたのもそれを物語つているようである。ではこの四水説と河源説とは一体どんな関係にあるのだろうか。

三　四水と河源

全体に非現実的要素の多い崑崙説話において、黄河のみが現実的なのはいかにも不自然に感じられるだろう。だから黄河が果して最初から四水の一に数えられたかどうかという疑問がおこる。これについて注目に値するのは楚辞離騒篇の

朝にわれ将に白水を済り、閬風に登つて馬を縶がんとす。[12]

という記述で、白水は崑崙に発する河川とされてきた。若しこれを四水のほかとすれば、崑崙には五水があることになる。事実河図括地象には、崑崙山に五色の水流があり、その中の白水は南流して中国に入り、黄河となることを記すから、五水説がないわけではない。[13]

しかしこれは緯書の盛行を見た後漢時代における五行説的付会と見てよかろう。とすれば戦国時代の文献たる楚辞の白水は、この五色水の一でないと考えられる。ここで更に興味を引くのは爾雅釈水に、黄河は崑崙から出て色白く、多くの支流を併せて始めて黄色になる、と記されることである。郭璞はこれに注釈して、発源するところが高激峻湊だから水の色が白いという。実際黄河が黄濁するのは黄土層地帯を流れてからで、上流部が白水と呼ばれたとしても不思議ではない。しかしこれは古く白水・赤水・黒水・青水から成る四水説があつて、その白水がのちに黄河に該当せしめられたと解すべきであろう。こう考えるとき上流が白いとする爾雅の記述は、他ならぬ白水の残像にすぎないのである。[14]

一方中国の地勢から黄河が西方の高山に発するという考えは、古くから漢民族の間に行われたにちがいない。またたとい実地を踏まないにしても伝聞によつてその上流部が黄濁していないことは知られていただろうし、或いは河川の水源はすべて清澄であると信じられていたであろう。それ故四水のうち黄河とするにふさわしいのが白水であつたと想像される。

このように崑崙が相当の大河を出すということは、暗にそれが大地の最高所であり中央であることを思わしめる。先に挙げた水経などの説も、崑崙説話が古く内包していたものを明示したにすぎないと言えよう。従つて先ずこうした地理的構想があつて、これとは別個に発生した河源の観念がこれと結合して、黄河は崑崙に発するという伝承が生れたと見るべきではないだろうか。

この中華思想と相容れない世界観的構想は、儒教の優勢化と共に破壊され微力となり、崑崙河源説のみが比較的現実性を帯びたものとして永く後代まで信奉されることとなつた。[15]従つて地理知識の発展が積石山を河源とした時にも、それに第二水源という地位を与えたにすぎない。禹貢が河源として崑崙を挙げなかつたのは、架空を排する為でもあろうが、またこの世界観の否定を意味したのかも知れない。

何れにしても中国人の崑崙河源説への執着は強く、後代河源付近の地理が明らかにされる度に、崑崙は河源と共に西方へ移動する運命を辿つた。[16]なおそれは崑崙ばかりでなく流沙・弱水などにおいても同様であつた。[17]このことは一面においてこれらの地名が元来実証され得ない不安定な知識であつたことを物語つている。

一種の世界地理的構想としての崑崙四水説が、河源説にむしろ先立つて存したとすれば、それは果して何を根拠として成立したものであろうか。これについて先ず四水の白・赤・黒・青という色彩に注意してみよう。この組合せは礼記の曲礼に見える四神のそれに合致するが、それぞれの方角は四神説に従わない。このことは四水の

名称が必ずしも漢民族の観念的所産でないことを示唆する。では一体その起源をどこに求めるべきであろうか。

このような地理的構想が生まれる為には、少なくともそれを発想させるに足る地勢を必要とするであろう。とすれば概して西高東低の地勢をもつ中国就中黄河流域では、その可能性が乏しいように思われる。それはむしろ中国以外の地域ではなかろうか。若しこれに類する説話が他の古代民族にあったとすれば、恐らくそれを受けたと考えてよかろう。ところが幸いにも、インドの原始仏教の中に、さらには旧約聖書に類似の説話を見出すことができる。では先ず仏典に見える四河説を取上げよう。

四　仏教の四河説

仏教経典の中でも比較的初期のものとされる長阿含経[18]の世記経を見ると、雪山の中の一高峰宝山の頂上に阿耨達池があるとして、次の如き四大河説が記される。

阿耨達池の東に恒伽河があり、牛口から出て五百河を従えて東海に入る。阿耨達池の南に新頭河があり、師子口から出て五百河を従えて南海に入る。阿耨達池の西に婆叉河があり、馬口から出て五百河を従えて西海に入る。阿耨達池の北に斯陀河があり、象口から出て五百河を従えて北海に入る。（巻十八　閻浮提州品）

長阿含経の世記経は漢訳のみに伝わる経典で、このほか大楼炭経[19]、起世経[20]、起世因本経[21]などの異訳本があるが、この部分の記述にはやや異同が見られる。すなわち長阿含経に言う雪山中の宝山は、他の諸本では単に高峰とするのみで、宝山は原典に固有名詞として挙げてなかったらしいし、[22]四大河とその源の四獣の組合せも婆叉（薄叉）河の馬口を除いては必ずしも一致しない。

だがともかくこれらによって、古代インドにも同一高山から四大河が流れ出るという説話があったことを知り得る。ここに言う雪山とはヒマラヤ山脈であり、恒伽（Gaṅgā）河がガンジス、新頭（Sindhu）河がインダスであることは改めて述べるまでもない。他の二河川については疑義もあるが。今日一般に婆叉（Vakṣu）河はオクソス（Oxus）に、斯陀（sītā）河はタリム（Tarim）又はヤクサルテス（Jaxartes）に比定される。[23]

一方阿耨達池（Anavatapta）は無熱悩池とも漢訳されるように、理想郷的性格をもつ湖であるが、阿含部の経典ではその位置が判然としない。しかし五世紀頃のインド僧世親の著わした阿毗達磨倶舎論には、大雪山の北に香酔山があり、両山の中間に無熱悩池があるとする。香酔山（Gandha-mādana）もその名の如く神秘的な山で、阿含部経典にもかなり詳細な描写があるが、そこでは阿耨達池とは何ら関係がない。ただこの山の北にあるという摩陀延なる大浴池の

記述が阿耨達池のそれにほぼ同じいので、のちにこれが混同されて阿耨達池との関連が生じたのではなかろうか。

ともあれ現在香酔山はチベットのトランスヒマラヤ山脈中のカイラス(Kailas)山に、阿耨達池はその東南にあるマナサロワル(Manasarowar)湖に比定される。[24] ところが前記四大河中、この付近から発源するのはガンジス、インダスの両河のみで、これら四河川の水源は同一でもなければ近接もしていない。従つて仏教の四河説もまた崑崙四水説に似て、現実的知識であるよりはむしろ観念的な地理的構想と言える。

言うまでもなく仏教の世界観は古くインドに行われたバラモン教や民間伝承を取捨し発展せしめたものである。だが古バラモン教時代には仏教に見られるような壮大な世界観はまだ成立しておらず、須弥山(Mahāmeru)の如きも単に大地の諸山の一で、仏教やジャイナ教に言う世界中央の神山たる性格は賦与されていない。河川についてもシンドゥ(Sindhu)川をはじめとする七河の観念はあるが、同一水源から四方に流出するというような世界観的構想は見られない。[25] なお仏教と互いに影響し合つたジャイナ教の世界観は、仏教のそれとも異なり、四河説を説かない。[26]

このように見てくるとインドの四河説は仏教固有の思想で、仏教成立以前は勿論、それ以後にも仏教徒以外には信奉されなかつたように思える。しかしこれは他の宗教に比べて真実乃至客観をより重視した仏教にしてはじめて取上げ得たものと考えるべきであつて、これに類似する伝承が古代インドになかつたとするのは早計であろう。

では仏教の四河説は果してインド起源であろうか。それには先ず比定が正しいとしてオクソス川やタリム川又はヤクサルテス川が含まれることを考察する必要があろう。ガンジス川中流域を世界の中国(Madhyadeśa)と考え、[27] ヒマラヤ山脈を居住の北限とした仏教時代のインド人が、それらを知つたとすれば恐らく仏教圏の拡大によつて接触した中央アジア方面の民族からの伝聞ではなかろうか。仏教は早く紀元前一世紀の半ば頃バクトリアに行われたというから、[28] 紀元一世紀の編纂とされる阿含経典にそれらが登場したとしても決して唐突ではない。だが若し仏教成立当初からこれらが四河説の中に存在を主張していたとすれば、その頃既に中央アジアとの文化的接触があつたか、或いは四河説そのものがその地方からインドへ伝播したか何れかでなければならない。

ここで想起されるのは、チベットに同種の伝承が行われてきたことである。その四河説は大清一統志はじめ二～三の中国書や外国人の旅行記などに断片的に紹介されるが、最も整つたものとしてチャールス＝ベルの報告に従つておこう。それによると霊峰カイラス山

から四河川が流出していて、馬口から発するのは馬の国チベットを、象口からのは象の国ネパールを、獅子口からのは獅子の如く強い人の住むラダーク(Ladakh)を、孔雀口からのは美人の国シナを貫流するという。[29] 若しこの説話が仏教伝播以前のものであれば極めて貴重な資料であるが、馬の国、象の国などという表現及び、象・獅子・孔雀などインドの動物を用いるところから、仏教四河説と仏教の地理区分説たる四主説[30]との混淆にすぎないことは明白である。チベット四河説こそは、反つて同一水源をもつ四河川があるという思想が他地域に伝播した場合、それを受入れた民族が郷土の河川をもつてそれに該当せしめようとする傾向のあることを如実に物語るものである。

このようにチベット四河説が仏教のそれを継承したものと考える以上、四河説の発生をマナサロワル湖付近の地形に求めることは大して意味がなかろう。結局仏教四河説も文献上はもとよりその地形的環境からもこれをインド起源とするに足る積極的な根拠を見出すことができない。

五　崑崙説話と仏教四河説との接触

インドの四河説もこのようにその起源は明瞭でないが、それは仏教によつて世界的構想にまで高められ、広くアジアの仏教圏諸国に伝えられて、人々の世界観の構成に影響を与えた。殊に中国では多くの興味ある展開を示したが、ここでは文献によつて確め得るいわゆる仏教伝来以後について述べてみよう。

仏教四河説と崑崙説話との交渉が文献に現われるのは、二世紀末の康孟詳訳興起行経の序をもつて嚆矢とするようである。それには崑崙山が閻浮利地の中心で、阿耨大泉の象口から出るのが黄河であると記す。注目すべきはこの崑崙の位置で、時代的にこれを遡る仏典にはこの記述は見当らず、中国の文献としても水経巻一と共にそれを記す初期のものとして重要である。更に四世紀初頭（西晋太安二年）の竺法護訳の仏五百弟子自説本起経には、阿耨達龍王が崑崙の墟に拠ることを記すが、これは明らかに中国における自由訳と見られる。さらに水経注巻一に引用される三世紀の康泰扶南伝及び四世紀の道安撰西域志も、阿耨達太山と崑崙山を同一視するから、この時代には既に仏教四河説が中国的解釈を受けて行われたことが知られる。

一方魏晋時代から隆盛に赴いた道教及び神仙思想は、須弥山の構造を参酌して崑崙山の仙境的性格を強化し潤色した。この時代の神仙的な諸書に見られる崑崙の構造は須弥山を彷彿させるが、中でも四世紀の王嘉の拾遺記には、崑崙を西方では須弥山と称するとあり、このことをみずから物語つている。[31]

仏教世界観の中国での新たな弘布は玄奘の大唐西域記に負うところが大きいが、その冒頭には四主説と共に四河説を掲げ、世界の地理的構想をかなり明瞭に示している。それは阿耨達池が贍部洲の中央にあるとし、徙多河が、地下を潜流して積石山に出て黄河となるという説を紹介する。また西域記にやや先立つ魏王泰の括地志巻八には、阿耨達山が崑崙山であるとして、獅子口から出る恒河（ガンジス）、馬口から出る嫣水（オクソス）、牛口から出る黄河の三河川を挙げるが、これによって当時仏教四河説がかなり一般化していたことを知り得る。

このほか玄奘の訳業に与つた道宣は崑崙説話を仏教的に解釈した。すなわち永徴元年（六五〇）撰の釈迦方志巻上において、山海経・穆天子伝・十州記などの崑崙は須弥山を指すとし、ほかに崑崙には近山と遠山があつて、前者は西涼酒泉の地にあり、後者は仏教でいう香醉山であるとする。また麟徳二年（六六五）撰の釈迦氏譜においては、大香山は崑崙の別名だとし、爾雅の文を引用して黄河が阿耨達池から発源すると述べる。

このように中国では仏教四河説と崑崙説話との習合が行われたが、関心は専ら四河川の発源地たる高山に向けられ、四河そのものについては殆んど論議がなかつた。これは中国の四水説が仏教伝来の頃にはもはや微弱であつたことのほか、元来それが仏教のようなまとまつた地理的構想でなかつたことによるのであろう。ただ黄河についてはこれを無視し得ず、それに関連づけようと意図された。上記の諸文献のほか、唐の玄応撰一切経音義（貞観末年、六五〇年頃）が、縛芻河は黄河であると記すことによつても明らかである。このことはチベットの場合と同じく、四河説の如き地理的構想が伝来地において、その地域の現実にふさわしい解釈を受け易いことを示すものとして注目される。

このように崑崙山そのものの究明すら実証的な方法ではなかつたので、四水説は依然として暗黒に閉されたままであつた。[62] われわれはこのとばりを開くためにも古く西アジアで信じられた別の四河説を顧るべき段階に到達したようである。

六　旧約聖書の四河説

周知のように旧約の創世記第二章には、ヤハウェ神が東方のエデンに一つの園を設けたことを記したのち、

一つの河がエデンから発し園を潤し、そこから分れて四つの源流となる。第一の名はピション（Pison）で、それはハビラの全地をめぐるもの、ハビラの地には金が産出する。（中略）第二の河の名はギホン（Gihon）で、それはクシの全地をめぐるもの。第三の河の名はヒデケル（Hidekel）で、それはアッシリアの東を流れるもの。第四の河、それはユ

ーフラテスである。[33]

と述べる。これらの中、ヒデケル（Hiddekel）はペルシャ語のティグラー（Tigra）すなわちチグリス川であることが明らかにされているが、ピション（Pishon, Phison）とギホン（Gihon, Géôn）については諸説に分れる。[34] エデンをはじめ聖書の地名の比定をめぐる論議は、古代以来ヨーロッパの宗教界を彩るものであつた。だがここでは六世紀のギリシャ人コスマス（Cosmas）の見解を掲げるにとどめたい。彼は自著キリスト教地誌（Christianikê Topographia）において、ピションはインドの川でインダス又はガンジスと呼ばれ、[35] 金を産出するハビラ（Havilah）とはインドのことであるとする。[36] またギホンはナイル川であるとし、[37] これら四河川が世界の東方海中のエデンに発源する特異な世界図すら作成したのである。

何れにせよコスマスのこれらの比定は、インドに旅行し仏教四河説を聞知したと思われる彼にして始めて成し得たのであつて、当時一般にそう信じられていたかどうか疑わしい。ただその河川名の如何に拘らず、ヤハウェ資料が記されたという紀元前十世紀頃に、[38] ヘブライ人の間で同一水源から発する四河の観念があつたのは確かであろう。ところでこの四河説もまた中国やインドの場合と同じく、彼等の住地西アジアにおいて発生したとするには何らの積極的な根拠がない。若しチグリス、ユーフラテス両河の水源を知つて四河説を構想したとすれば、それらの水源を東方に置くのは不自然である。これは恐らく高山の多い中央アジア方面の地形を聞知したのか、或いは四河説それ自体を東方異民族から伝聞したか何れかであろう。

結　論——四河説の発生と伝播——

これまで述べてきたところで明らかなように、中国以外にも類似の四河説がある以上、崑崙四水説が単独に発生したとはもはや考えられないだろう。とすればこれらの中いずれかが中国に伝播したのだろうか。コンラディは崑崙山と須弥山の構造の類似から、崑崙説話の成立に須弥山説が与つただろうとし、[39] アンリ＝マスペロも先秦時代における須弥山説の東伝を主張した。[40] 小川琢治博士はまた楚辞天問篇や淮南子の崑崙山をバビロン城の伝説ではないかと推定し、エデンの園との関連をも指摘された。[41] このほか野村岳陽氏は須弥山説と崑崙説話は本来同一のものが異なる民族文化の上に形を異にして現われたに過ぎないと述べられた。[42] 上記諸種の四河説を考証された藤田元春博士は、古くインド又はバビロニヤに起つた伝説が何回となく彼此の間に伝わり、その一方が中国に入つて崑崙説話となつたであろうとの見解を示された。[43]

これら諸学者の見解はいずれもそれなりに聞くべき卓抜さを備えるが、その当否如何についてはわれわれの結論をもつて答えること

にしよう。既に指摘したように、それぞれの四河説のうち、中国では黄河が、インドではインダス、ガンジスの両河が、またヘブライの地ではチグリス、ユーフラテス両河が確実に比定される現実河川にすぎない。このことはチベットの四河説に見られるように、これらがいずれも他地域からの伝聞であるらしいことを物語る。またその水源を中国で西方に、インドで北方に、ヘブライで東方に置くのは、単に地勢的位置を指示するだけでなく、憶測すれば四河説そのものの発生地若しくはその伝来の方角を暗示するように思える。つまりこれら四河説は姉妹関係にあると見られ、それらに先んずるよりプリミティブな四河説を受けたものと言うほかはない。とすればその地形とも合せ考えて四河説の誕生地は中央アジア地方に求めらるべきであろう。

これについて崑崙の字義は何らかの手がかりを提供しないだろうか。先にこれを中国起源とする御手洗氏の説を紹介したが、普通には外国語の音訳と見るのが有力で、白鳥博士はチベット語の Gan-li (lin)（雪山の意）に、[14] 金沢庄三郎博士はトルコ語の Koram（石塊の意）に語原を求められた。[15] 何れにしても崑崙が中央アジア地方の言語に由来することはほぼ確かな事実であろう。なお金沢博士によれば、パミール(Pamir) は古くペルシャ語で Bam-i-dunya（世界の屋根）と呼ばれたという。[16] 事実この付近の地形はその名にふさわしく、この呼称も四河説と関連するかとさえ思われる。

恐らく発生当時の四河説はそれほどまとまった世界地理的構想でなかつたであろう。だがそれが周辺の文化民族に受け継がれたとき彼等の郷土の外にある未知の世界をも含めた一種の地理的世界観にまで高められた。そして彼等はその四河川の一部に郷土の川を当てることによつて、世界の中に自己を位置づけたのである。崑崙の四水が黄河を除いて現実的でないのも、中国の地形では該当せしむべき河川が遂に見出せなかつた為にほかなるまい。それらが色彩名であることも、そうした名称の河川の多い中央アジア方面からの伝聞にそのまま従つたものであろう。[17]

こうしてアジア諸民族の間にひろまつた四河説は、その定着した地域によつて各々特色ある変貌を遂げることとなる。中国では早く四水の観念が滅び専ら河源としての崑崙が関心を呼んだ。これは四河説を維持するに足る地勢的環境を欠いたことによろうが、一面儒教的合理主義の抬頭によるものと思われる。これに対してインドでは四主説と相補う仏教の地理的世界観として整形された為、インドのみならず広く仏教圏の民族の支持を受け、中国や日本で描かれた特異な仏教系世界図の基本的骨骼とすらなつたのである。[18] またキリスト教に取り上げられては、四河そのものよりはむしろこの説話のもつ神秘性が貴ばれ、永くキリスト教徒の楽園思慕を誘い、中世ヨ

ーロッパでは楽園や四河が世界図上を濶歩したほどである。[49]

このように四河説は地理知識の進歩によつてそれぞれの水源が明らかにされるまで、その地域に適応した形において人々の世界地理的構想を支配した。これに関して十四世紀の回教徒イブン＝バトゥータは興味ある報告を残している。その旅行記中のナイル川を叙述した箇所で、ナイル、ユーフラテス、サイハーン(Seihân ヤクサルテス Yaxartès)、ジャイハーン(Djeihân オクソス) の四河川が楽園から流出するという伝承を紹介する。[50] しかもそのすぐあとで、世界の五大河に二種あるとして、ナイル、ユーフラテス、チグリス、サイフーン(Seihoûn)、ジャイフーン(Djeihoûn) の一組と、他にシンド(インダス)、カンク(Canc ガンジス)、ジューン(Djoûn ジュムナ Djoumna)[51]、アタル(Etel ヴォルガ)、サルー(Sarou 黄河)[52]の五河川を挙げている。[53]

ここに記された四河説は明らかに創世記の系統を引くもので、十四世紀頃の西アジアではそれがこんな形で行われていたと見てよかろう。だが二種の五大河は、彼がアジアの諸地方で聞知した四河説の河川名が互いに不一致であつたところから、自身の見聞をも加えて大河を適当に組合せたにすぎないのではなかろうか。それにしてもナイルを含む一組は西アジャや中央アジアでの四河説を、インダスに始まる他の五大河は仏教のそれを、それぞれ基盤としているように思える。

以上で崑崙四水説が中国起源でなく、仏教や旧約聖書の四河説とともにそれらが恐らく中央アジア方面のより古い四河説を受けたものであろうことを明らかにすることができたと思う。勿論それはかなり持続的な文化接触の結果であろうし、また伝播後における四河説相互間の影響を否定するものではない。ともあれ崑崙四水説こそは古代中国と西域地方との文化的交渉を証示する有力な一資料というべきであろう。

今後さらに諸賢の御叱正を得て補訂の機会を持ちたい。擱筆にあたり絶えず御指導御鞭撻を頂いた室賀信夫先生、御教示を賜つた森鹿三・織田武雄両先生に、深い感謝の意を表する。

① 山海経の海内西経では万仞、淮南子は万一千里百一十四歩二尺六寸、水経注本文及び河図括地象は万一千里とする。

② 森三樹三郎 支那古代神話 昭和十九年 二三一―二頁。
御手洗勝 崑崙伝説の起源（広島文理科大学史学科教室編 史学研究記念論叢 昭和二十五年）

③ 小川琢治 支那歴史地理研究 初集 昭和三年 二五五頁。
拙稿 中国古代地理思想考（大阪学芸大学紀要 第二号 昭和二十九年）

④ 御手洗勝 前掲論文。

⑤ 石田幹之助 黄河の水源及び崑崙山に関する支那人の知識の変遷（史学雑誌 二十五編八―九号 大正三年）

⑥ 青海省のアムネ＝マチン（Amme-mačin）山脈とするのが定説である。

⑦ 御手洗勝　前掲論文。

⑧ 禹貢の弱水は甘粛省のエチナ（Etsina）川とするのが定説である。（白鳥庫吉　西域史研究　上　昭和十六年　二七九頁）

⑨ 西山経に〃北五十里労山という。茈草が多い。弱水はここから出て、西流して洛に注ぐ〃とある。

白鳥博士によれば、弱水には二義あつて、一は黄色を意味する蒙古語 Sarga 或いはトルコ語 Saryk の音訳としての弱洛水の略称で、他は水力が弱く木船を乗せるに堪えず皮船にて渡るべき河流を称したという。（白鳥庫吉　前掲書　下　昭和十九年　二四三―四頁）

また黒水も一に止らず、海内経に幽都山に発するものを挙げるし、禹貢のそれも崑崙の四水ではないようである。白鳥博士は禹貢の黒水を甘粛省西部の Bulungir（蒙古語、渾濁の義）川に比定された。（前掲書　上　二七九頁）

⑩ 小川琢治博士によれば、その音から考えて壺領は崑崙であろうという。（前掲書　二六〇頁）

⑪ 例えば〃赤水の西、流沙の東〃　〃流沙の東、黒水の西〃　〃黒水青水の間〃などと表現する。しかしその記述から四水の流路は追跡できない。

⑫ 魏の張揖撰博雅巻九によれば、崑崙の虚にある三山の一。

⑬ 穆天子伝の郭注にも、崑崙に五色水があるとし、晋の張華撰博物志にも括地象の同文を引用するから、五水説は魏晋の頃にはかなり一般化していたと思われる。

⑭ 清の戴震は楚辞の白水について爾雅の言を引用して、それが河源であると述べる。（屈原賦通釈　上）

⑮ 史記大宛伝所引禹本紀に、黄河が崑崙から出ると記し、漢の武帝が見た古図書にも同様の記載があつたことを司馬遷が語つている。また爾雅や水経注でも崑崙を河源とする。

⑯ 石田幹之助　前掲論文。

藤田元春　河源論（内藤博士頌寿記念史学論叢　昭和五年）

⑰ 漢書西域伝、後漢書西域伝、魏略大秦国の条などに見える。

⑱ 後秦弘始年間（三九九―四一六）仏陀耶舎、竺仏念共訳。

⑲ 西晋の法立、法炬共訳。

⑳ 隋の闍那崛多等訳。

㉑ 隋の達摩笈多訳。

㉒ 起世経並びに起世因本経では〃復有高峰、衆宝間雑、迥然秀出〃と記すのみ。大楼炭経は抄訳らしくこの高峰についても述べず、直接雪山の頂上に阿耨達池があるように記す。

㉓ S. Julien; Memoires sur les contrées occidentales. Tome I 1857 p. LXXIV 但し sîta 川の比定はない。

李光廷　漢西域図考　巻一　同治九年（一八七〇）

S. Beal; Si-yu-ki, Buddhist Records of the Western World. Vol. I 1884 pp. 11～12

S. Hedin; Southern Tibet. Vol. I 1917 p. 129

N. L. Dey; The Geographical Dictionary of Ancient and Mediaeval India, 1927 p. 18, 187

アム川(Amu daria) の異名 Oxus はギリシャ語、Vaksaはペルシャ語、Jihun はアラビア語である。(馮承鈞　西域地名　一九五五年　五七頁)

なお中国の古文献には仏教四大河の訳名を掲げたものがあり、梁の宝唱(約四八三～五一八)撰と推定される翻梵語巻九には、波叉を胸、私陀を冷、恒河を天堂来、辛頭を験とする。唐の玄応撰一切経音義巻二十四、南宋法雲撰翻訳名義集巻三、南宋志磐撰仏祖統紀巻三十三はいずれも縛芻を青と訳す点で翻梵語と異る。Sītā は梵語で寒冷という意である(白鳥庫吉　前掲書　上　一六七頁)からその訳名は正しい。その他のものについては当否を定め難いが、Vakṣu を青河と訳しているのは崑崙の青水とも関連して注目される。

㉔ S. Beal は無熱悩池をオクソス川の水源たるペミール高原中の湖サリーククル (Sarîk-kul) に比定する (ibid. Vol. I p. 12) が、S. Hedin のチベット探検以後マナサロワル湖とするのが有力である。(S. Hedin, ibid. Vol. I p. 113)

なお李光廷はそれ以前にマナサロワル湖に当てた。(李光廷、前掲書)

㉕ W. Kirfel; Die Kosmographie der Inder. 1920 s. 11～12

㉖ 木村泰賢　小乗仏教思想論　昭和十年　二五三―五頁。

金倉円照　印度精神文化の研究　昭和十九年　一三四―五頁。

㉗ 高楠順次郎・木村泰賢　印度哲学宗教史　昭和十五年　八頁。

㉘ 羽田亨　西域文化史　昭和二十三年　九八―一〇〇頁。

㉙ C. Bell; Tibet, past and present. 1924 p. 11　田中一呂邦訳本　一七頁。

乾隆九年(一七四四)撰大清一統志巻三百五十二、乾隆二十六年(一七六一)の斉召南撰水道提綱巻二十二及び、徐松(一七八一～一八四八)撰西域水道記などには、馬口・象口・孔雀口・獅子口を岡底斯山(カイラス山)の周囲の山峯であると記す。

ヘディンによればチベット人が Langtschen-kabab (象口)から出るとするのはサトレジ川であり、Tamtschok-k. (馬口)を源とするのはブラマプトラ川、Singi-k. (獅子口)を源とするのはインダス川、Maptschu-k. (孔雀口)を源とするのはカルナリ川(ガンジス川上流)だという。(S. Hedin; Transhimalaya, Entdeckungen und Abenteuer in Tibet. 1920 Bd. II s. 157)

なお左記の文献にも簡単な報告がある。

河口慧海　西蔵旅行記(改訂版)昭和十六年　一五一～二頁。

㉚ 拙稿　中国仏教における世界区分説(田中秀作教授古稀記念地理学論文集　昭和三十一年)

㉛ 石田幹之助　前掲論文

野村岳陽　文献上より見たる崑崙思想の発達(史学雑誌　二十九編五―六号　大正七年)

森三樹三郎　前掲書　二三七頁。

㉜ 清代にカイラス(岡底斯)山が知られると、これを崑崙すなわち阿耨達山だとした。徐松の西域水道記や俞浩の西域考古録(巻十六下)などに見える。

㉝ 関根正雄訳　旧約聖書創世記　昭和三十一年　一〇頁。
㉞ 内村鑑三全集　第三巻　昭和七年　一四五―六頁。
㉟ J. W. McCrindle; The Christian Topography of Cosmas. 1897 p. 75, 366
㊱ J. W. McCrindle; ibid. pp. 372～373
㊲ J. W. McCrindle; ibid. p. 41, 75
㊳ 関根正雄　前掲書　一八三頁。
㊴ A. Conrady, Indischer Einfluss in China im 4 Jahrh. v. Chr., Zeitschrift der deutschen Morgenlandischen Gesellschaft, Bd. LX, 1906, s. 344
㊵ マスペロ　先秦時代の支那に於ける西方文明の影響（史学雑誌　四十編八号）
㊶ 小川琢治　前掲書　二七〇頁。
㊷ 野村岳陽　前掲論文。
㊸ 藤田元春　日本地理学史（増補版）昭和十七年　四六一頁。
㊹ 石田幹之助　前掲論文。
㊺ 金沢庄三郎　崑崙の玉　昭和二十三年　二〇頁。
用例としてカラコルム（Kara-Koram, 黒い石塊の意）山脈を挙げている。
㊻ 金沢庄三郎　前掲書　三六頁。
㊼ 例えば宋史西域伝に、于寘城の東に白玉河、西に緑玉河、烏玉河があり、いずれも崐崗から出るという記事がある。
㊽ 室賀信夫・海野一隆　日本に行われた仏教系世界図について（地理学史研究　第一集　昭和三十二年）
㊾ 織田武雄　中世の世界図に就いて（史林　三十三巻四号　昭和二十五年）
㊿ C. Defrémery et B. R. Sanguinetti; Voyages d'Ibn Batoutah. Tome 1, 1853 p. 78
(51) 平野部で分流するブラマプトラ川の本流 Jamuna 川を指したもの。
(52) 彼はその記述において大運河を黄河の延長と誤っている。
(53) C. Defrémery et B. R. Sanguinetti; ibid. pp. 79～80

〔追補〕

先頃手許に届いた岑仲勉著黄河変遷史（一九五七年六月刊）を繙くと、黄河重源説は砂漠の多い西域地方に起源するものと解し、その証左の一として崑崙の四水にも触れ、仏教四大河との同一視を試みている。だが最も問題となる四河の考証の部分は他の研究文献に従っており、しかもそれらの文献は今のわが国で容易に見ることができないので、批判は将来に俟つことにしたい。

A Study of the Development of the Local System in Ancient Times in Japan

by

Atsuru Yagi

This article presents the development of the local governing system before the Reformation, as a mean of understanding the Reformation in the *Taika* (大化) era, or the Statute System (律令制). As a result of the separation of the imperial household as a traditional chief from the imperial court as a organization in the central structure, the process of the constructive estrangement of the former from the latter made appearance of the factor that the rule over countries developed at least in two series. The separation of the governing system connotes a contrasty character in the principle of organizing local people; in the local basis of the imperial household it is the predominant factor that centripetal pseudo-blood-relation remains stagnant and relations of the family system are regenerated, while that of the imperial court is of the character that casts off the private family connection and has a possible tendency to reorganization within real villages. So far as this concerns, the Reformation in the *Taika* era means integrity of the governing series by the power of the imperial household, or a nation-wide development of the imperial court's governing system.

A Geographical Research on the Legend of Mt. *K'un Lun* and its Four Rivers

——In Comparison with Similar Buddhist and Christian Legends——

by

Kazutaka Unno

In ancient China, there was a popular belief that four rivers rose from Mt. *K'un Lun* which was venerated among the people to be a mysterious mountain. The mountain was presumed to be situated far to the north-west of China, and although one of the four rivers must undoubtedly be the *Hwang ho* (Yellow River), the rest of them can't be identified. In India of old, too, the Buddhists believed that the four big rivers of *Gaṅgā*(Ganges), *Sindhu*(Indus), *Sītā*(Tarim) and *Vakṣu*(Oxus) flowed out of Lake Anavatapta among the Hymalayas. Furthermore,

it is written in the Genesis of the Old Testament that there were four rivers proceeding from the Garden of Eden supposed to be in the East. Evidently these four rivers stated in each case were all imaginary ones, since they actually shared no identical river-source. It may of course be said that to give birth to such popular belief, there must be some geographical condition or configuration appropriate to it. No such land-feature, however, can be found in any of these three countries, —— China, India and ancient Hebraic country. Should we then regard these legends as a strange coincidence? Since there seems to be little or no possibility of coincidence, the author is inclined to think that the original legend was first created in earlier ages among the tribes who inhabited the mountainous areas in Central Asia, and it later spread far and wide. It is probably because there were actually no appropriately identifiable rivers that not all of the four legendary rivers can be found in China and Hebraic country. It may also be said that from the dominant land-feature of each country, the source of all the four rivers was considered in China to be north-westerly, in India to be northerly and in Hebraic country to be easterly, but another possibility in this connection is that they may, in each case, have meant the direction of the source whence the original legend was brought over.

Friedrich Naumann and his Age
——Prelude to the Weimar Democracy——

by

Masaki Miyake

In "Die Improvisierte Demokratie der Weimarer Republik", Professor Theoder Eschenburg asserts that the Weimar democracy was thoroghly an improvised one and had no root in the preceding age of Wilhelm II. But I think that its very root can be found in Friedrich Naumann's advocacy of a coalition "From Bassermann to Bebel", and that this advocacy became clear when his former advocacy of "soziales Kaisertum" suffered a set-back in the "Daily-Telegraph-affair." Hear I want to trace the formation of this advocacy in Naumann's texts and its background. I hope thereby to bring to light a side of the prelude to the Weimar democracy.